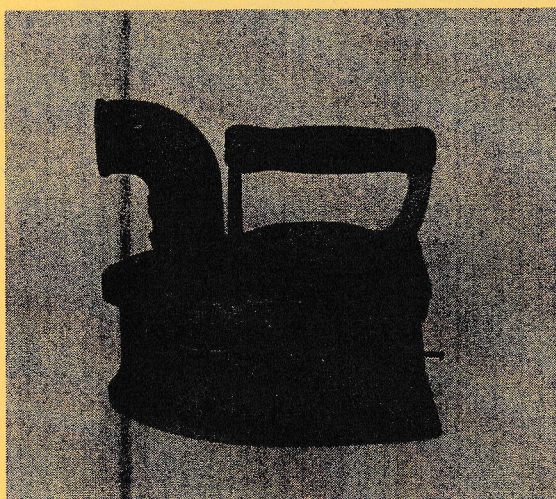


特別展

-上里町収蔵展 10-

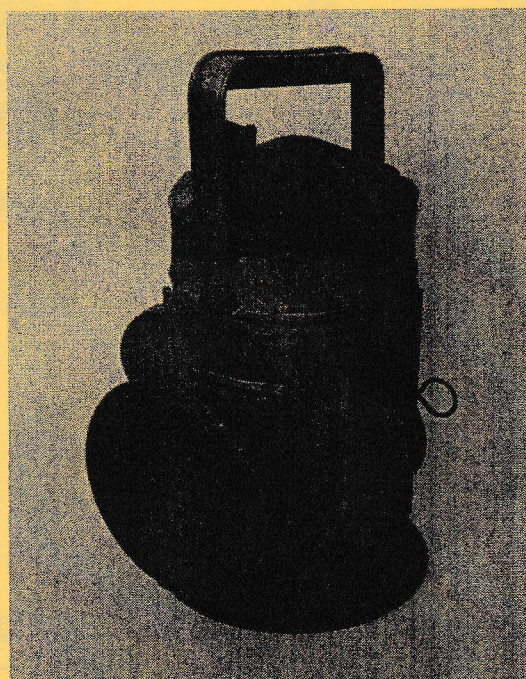
昔の道具 しらべ

～この道具は何に/どうやって使ったのか?～



-炭火アイロン-

-カンテラ-



令和4年4月1日（金）から
7月3日（日）まで

上里町立郷土資料館

ごあいさつ

上里町立郷土資料館では、町内に残る様々な道具の収集・調査・研究・公開・保管を行っています。収集された道具はすべてが当時のままの姿を残しているわけではありません。中には細部については不明な物もあります。そこで、様々な道具を数多く収集することによって不完全な道具の足りない部分を補いながら調査・研究・公開が進められています。

その一環として上里町の小学校では3年生になると「昔の道具調べ学習」がはじまります。郷土資料館では、学校の要請によりそのお手伝いとして様々な道具を持ち込んで昔の道具体験を行う出前授業を実施しています。アイロンのルーツである炭火アイロンから今あるコードレスアイロンまでどのように発達してきたのか、あるいは日本古来から使われていた火熨斗（ひのし）と炭火アイロンには共通項があることなどに小学生の興味は尽きないようです。

今回の展示では、上里町で収集された道具の中で、実際に体験学習で使った生活にかかせない道具を展示しました。この道具は一体何に使うのか、どうやって使うのか、そして今の生活がどんな道具から発展してきたのか、懐かしさとともにお考えいただきながらぜひご覧下さい。

令和4年4月

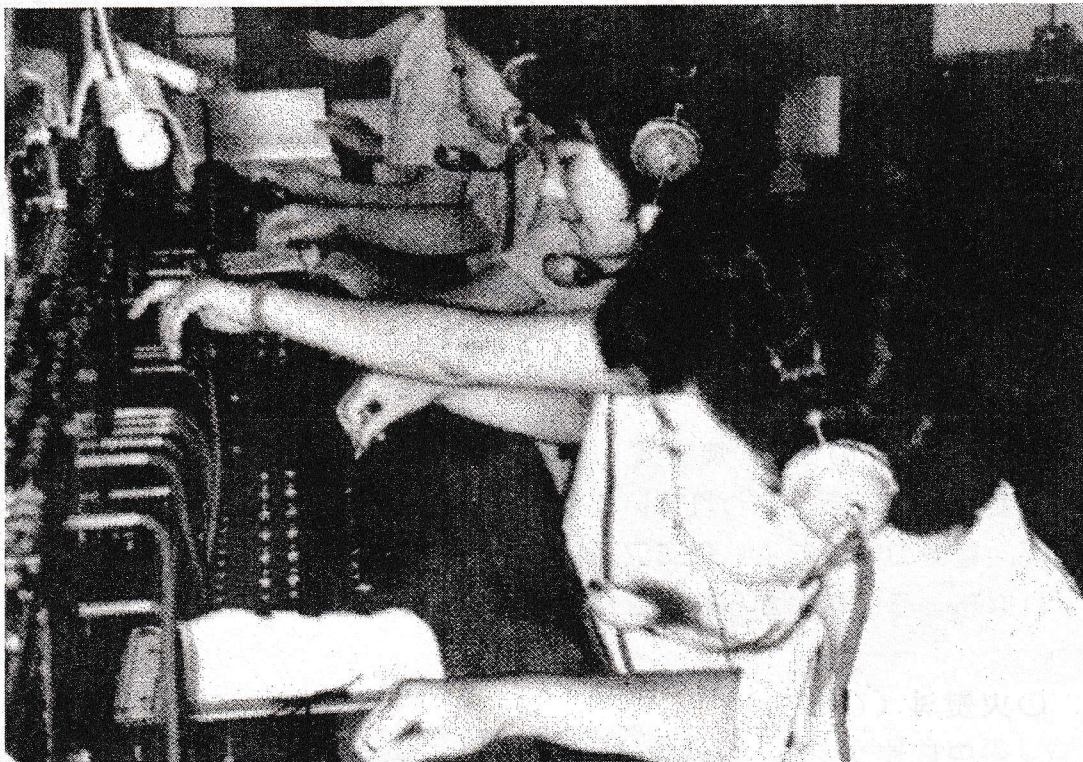
上里町立郷土資料館

1.通話する

電話は音声を電気信号に変えて離れた場所に伝達し、これを再び音声に戻すことで、相互に通話できるようにした通信方法で、様々な形で発達してきました。

○有線放送電話（ゆうせんほうそうでんわ） 「何番さん 何番さん」でおなじみの有線放送電話が上里町で開始されたのは昭和35年（1960）6月1日のことでした。その業務は単に電話だけではなく、自主番組（おはよう番組等）、告知放送（村の情報）、ラジオ放送などがありました。その後、農集電話（上里地域集団電話）の普及や昭和53年（1978）10月31

日に上里電話交換局が開局することによって一般電話の利用が可能になったのを受けて、昭和 52 年（1977）12 月 1 日に閉鎖されることになりました。



-役場庁舎内で行われていた有線電話交換業務-

また、これまで有線によって行われた広報・非常災害伝達施設として、広報塔（町内 32 か所 昭和 63 年（1988）に 6 か所増設され計 38 か所）が設置され開局したのは、昭和 54 年（1979）4 月 1 日のことで、さらに災害時の通信網確保のために広報塔を利用した無線による上里防災行政無線が開局したのは、平成元年（1989）4 月 1 日のことでした。（広報塔はこの時 15 か所の増設によって 53 か所となりました。）

※閑話休題 埴保己一とヘレン・ケラー

電話を発明したグラハム・ベルの祖父や父、兄弟は弁論術とスピーチに関連した仕事をしていました。また、彼のお母さんと奥さんは聴覚障害者でした。そこでベルは聴覚と言語に関する研究から聴覚機器の発明を思い立ち、これが電話の発明につながりました。

こうした中、日本からアメリカの教育学を学びに留学していた文部省の伊沢修二は、英語を聞き取ることはできるが、話すこと特に発音がうまくできずに悩んでいたところ、知人から聴覚と言語に関する研究及び弁論術を研究していたベルを紹介されました。また、そのころまだ幼かったヘレン・ケラ

ーとその母親もベルのもとに通っていました。後にヘレン・ケラーに家庭教師のサリヴァンを紹介したのもベルです。

ある日ベルと伊沢修二の授業中にヘレン・ケラーのことが話題になりました。そこで伊沢修二は日本には視覚障害者でありながら偉大な功績を残した塙保己一がいたことを話題にしました。これを知ったヘレン・ケラーは塙保己一に憧れ、いつか日本へ行ってみたいという希望を抱くようになりました。

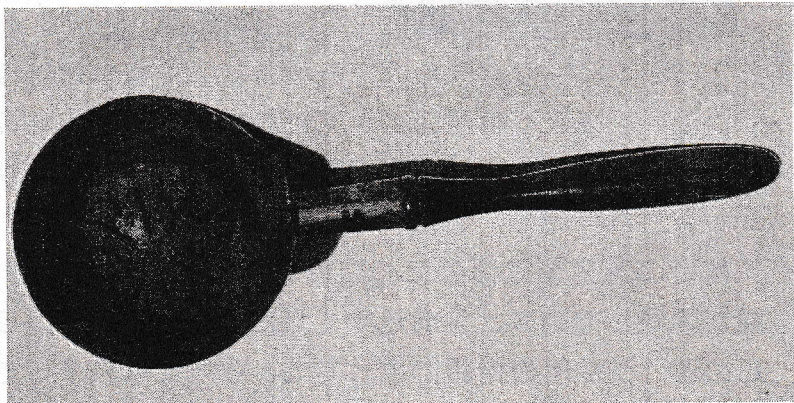
その後、成人したヘレン・ケラーは3度来日して、塙保己一のゆかりの地を訪れその事績に触れることができました。

2. シワをのばす

火熨斗（ひのし）や焼き鑊（こて）は今から1,000年以上前の平安時代から使われていたといわれています。その後、昭和初期まで使われていましたが、電気の普及により電気アイロンがその地位を奪うことになりました。それはちょうど着物から洋服にかわる時期でもありました。

○火熨斗（ひのし）

中に炭火を入れて布に当て、その熱で布のシワをのばしたり、仕立ての仕上げに用いる道具で、真鍮製の底が平らな円筒



形の器の側面に短い筒状の柄がついていて、そこに木の柄を差し込んで使います。

炭火アイロンや電気アイロンの出現により次第に使われなくなりました。

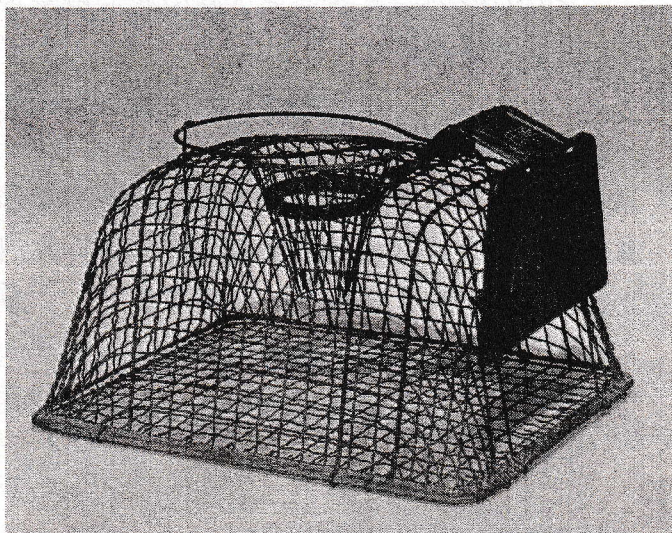
○焼き鑊（やきこて・やきごて） 着物の仕立てや、襟・袖など細部のシワをのばすのに使われていました。

○炭火アイロン 中に炭火を入れ、その熱で布などのシワや縫い目をのばす道具です。明治時代に洋装化に伴って伝来しそれまでの火熨斗に取って代わりましたが、大正時代に電気アイロンが出現すると次第に使われなく

なりました。形は電気アイロンとほぼ同じですが、中に炭火を入れるため胴部が大きく高さもあり、上面が開閉できる蓋となっています。蓋にはガス抜き用の煙突と握り手がついて、後方には空気を調整する穴がつけられています。

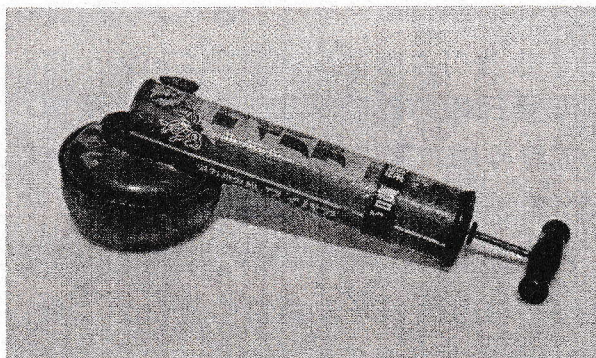
3.害虫を駆除する

蚊遣（かやり）は蚊を追いつぶすために煙を立てていぶすことで、カイブシ・カヤリビ・カビなどとも云われ、スギやマツなどの大鋸屑（おがくず）やカヤやクスの小枝、ヨモギなどの草、落葉などが炊かれていました。江戸時代後期にはカヤを束ねたものが蚊遣木として売られていました。



○ネズミ捕り器 金属を格子

に 30 cm 程の籠に編んだ形で、中に餌を入れおびき寄せ、バネなどのしかけで入り口がしまり、ネズミを捕獲します。また、上部には漏斗状の円形の穴がありここからネズミが入ると出られなくなるようになっています。



○噴霧器 円筒状の先端に薬剤入れを取り付けて水鉄砲の要領で害虫に向けて噴霧する道具です。上面には蚊と蠅の絵が描かれています。

○蚊取り線香 明治時代に除虫菊が移入されたことで明治 20 年

（1887）に棒状蚊取り線香が発売されました。その後、現在のような渦巻形の蚊取り線香となり、今は電気蚊取り器が発売されています。

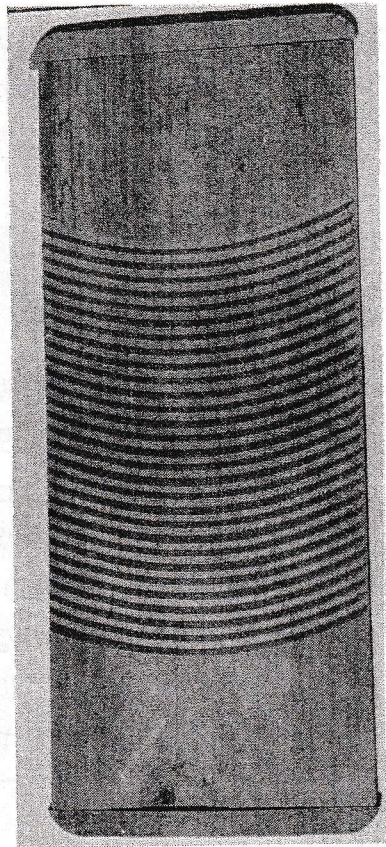
4.洗う

江戸時代の洗濯は溝の無い板や石の上で手でもんだり、足で踏んだり洗濯棒で叩いたりして洗う方法がとられていました。

○盥（たらい） 円筒形の本製容器で杉やヒノキなどを短冊形に割って円形にならべ連結して竹の箍（たが）でしめた底の浅い結桶です。手洗いが詰まって「たらい」になったといわれています。

手洗いや洗面用の洗面盥や洗濯や行水を行うための洗濯盥など様々な用途に応じて使われていました。

○洗濯板 衣服等を洗う時に使う溝を彫った縦長の板で、溝は横に彫ってあり直線と曲線のものがあります。この板を盥の中に入れて手前を縁に当て斜めにして布をのせ、石鹸をつけてこすりつけるようにして洗います。明治時代に洋式化に伴って移入され普及しました。



○張板（はりいた） 洗った着物を干すのに用いる長い板です。着物を仕立て直しする場合は縫い目をすべて解いて洗い、糊を付けて布幅をきちんと整えてこの板に張り付けて干してまた縫い直しました。

5. 灯す

上里町では大正9年（1920）から高圧線の鉄塔が立ちはじめ、翌10年10月から電気が通りました。そこで灯りは次第に電灯にかわっていきましたが、当時は1部屋に1つが原則で、乳白色のガラス笠に白熱球を付けそこにスイッチがありました。その頃は停電も多く、養蚕の時には臨時電灯をつけたりしました。

○燭台（しょくだい） ロウソクを使った照明器具で、以前からあった油皿をのせた灯台にロウソク立をつけた物です。主に和ロウソクが普及した江戸時代以降に使われるようになりました。

○行灯・行燈（あんどん） おもに室内で用いられた照明器具で、もとは字のとおり手に持って夜歩く時に足元を照らす道具で、油皿の火が風で消えないように木枠に和紙を貼って保護したものです。室町時代から使われ

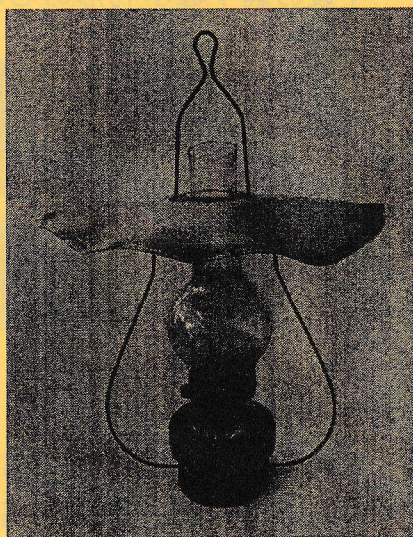
ていましたが、持ち歩きに便利な提灯や手職（てしょく）が普及すると、室内に置いて使う照明具となり、置行灯、掛行灯、釣行灯、辻行灯などさまざまな形の行灯が作られました。

○カンテラ 石油を燃やして明かりとする照明器具で、ランプが普及する以前に使われていました。その語源はポルトガル語の *candeia* からきています。前面にレンズをつけた筒形中にブリキやトタンでできた缶に芯をたてて、これに火をつけてまわりを照らします。中には赤と緑（青）のセロハンが貼られ信号としても使われていました。

○竈灯（がんだう） 手持ち用の照明器具で現在の懐中電灯に相当します。円筒形の上部をふさいで把手をつけて、下方の中には2つの交わる鉄の輪があり、その中央にロウソクを立てて火をともして明るくします。これはどんな方向に振り回してもロウソクは常に立っていて火が消えないように工夫されています。その後、ロウソクの代わりに金属製の灯油入れを取り付けるようになりました。

○ランプ 江戸時代末期に伝来した灯火具で LAMP の呼称をそのまま使い日本語では「洋灯」と書きました。灯油を入れる金属製またはガラス製の油壺に口金を付けて、細い綿のより糸の芯を灯油に浸し、毛細管現象で吸い上げられた灯油を口金のところで燃やし、ガラス製の火屋（ほや）で囲って灯りとしました。

口金に取り付けたつまみを回して芯を上下させることで明るさを調整し、ガラスの火屋には油煙が付着するため毎日掃除が必要で、さらに揮発性が高く危険であったことから電気が普及すると次第に姿を消して行きました。



6.暖める

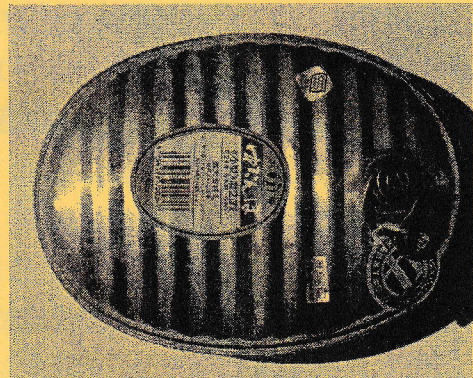
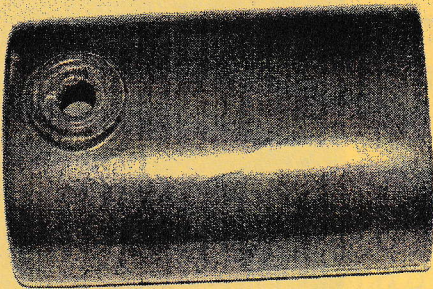
古代には手のひら程の丸い石を焚火等で暖めて懐炉として使う温石（おんじゃく）や塩を固めて焼いた塩温石などが使われていました。元禄（1688～1704）の頃、懐炉や湯タンポが作られるようになると様々な暖房器具が

作られるようになりました。

○行火（あんか） 手足を暖める移動式の暖房具で、瓦製で火入れの燵（おき）や炭火・炭団（たどん）などを入れ、上に布団をかけて手足を暖めます。江戸時代には市中の辻に設けた番所などでも用いて辻番とも呼ばれていました。過熱による火傷を考慮して和紙を貼ったり布で覆ったり、寝床に入れたり、椅子の足元に置いて足をのせ、毛布で覆ったりすることもありました。円形で火入れ蓋がついたもの、かまぼこ形や方形の一面があいてそこに火を出し入れする物など様々な形があり、側面には円形や楕円形、三日月形などの穴があげられています。

江戸時代には櫓状の木の枠の中に行火をいれた置炬燵が広がったために、炬燵とよく混同されています。

○湯たんぽ 中に熱いお湯を入れて布や専用の袋で包み、寝床に入れて足や腰を温める保温用具です。元禄年間にはすでに使われていました。陶器製にはかまぼこ形や円筒形があり、昭和のはじめころから波形をつけたブリキ製の扁平な小判形のものが出現して普及しました。



【引用参考文献】

- 1965 「日本の生活文化財」 祝 宮静 第一法規出版株式会社
- 1979 「図録 民具の基礎知識」宮本肇太郎 柏書房
- 1990 「民具入門」宮本肇太郎 慶友社
- 2017 「絵引 民具の辞典 普及版」石井宏実 河出書房新社

展示解説 令和4年4月1日-第1版-
上里町収蔵展 10 昔の道具しらべ

～この道具は何に/どうやって使ったのか？～

上里町立郷土資料館